

授業は、教師からの問いかけや子どもの問いをもとに学習を進め、学習のねらいと学習内容の定着をめざす。意図的・計画的な教師の問いかけは重要であるが、できれば子どもの問いを中心にした授業を構成し、子どもの側に立った授業を願う。子ども自らが考え、主体的に学ぶ大きな動機となるし、何よりも他人事ではなく自分事として授業を考えていくからである。教師からの問いかけだけで終始する授業は、やがて子どもたちの意欲を減衰させる。熟達教師であれば経験から理解できる。

子どもが自ら問うことができるためには、学習対象（事象）との出会わせ方が、最も重要である。できるだけ当該学級の子どもの生活に根ざす学習対象を提示してみる。子どもの既有倫理や既有事実新事実をぶつけてみる。すると、子どもの内面には、矛盾や困惑、驚嘆などの問題意識が湧いてくる。4年生の社会科「人々の

安全を守る」の警察の仕事に目を向けさせる単元導入で行った例である。当時の市の交通事故死の原因は、カーブ、交差点より直路が一番多かった。子どもたちは、当然、カーブ、交差点での交通事故死が多いと考えているという予想から、右のようなカーブ、交差点、踏み切り、直路を書いた簡単な図を示し、交通事故死の一番の場所を発表させた。そして、赤丸の横に死亡数を書いた。子どもたちから、「えっ、なんで?」「なんで、まっすぐな道で?」「先生、スピードの出しすぎでしょ?」などなど、つぶやきも含め、いろいろなことをどんどん発表する。子どもの論理と食い違う事実とも身近な問題だからであろう。

実は、この問題意識は、なぜ調べるのか、何を調べるのか、いかに調べるのかという学ぶ意味も包括している。今、子どもの内側に存在する問題意識を覚醒させることが重要である。子どもが自ら問う授業は自分たちが切り拓く授業である。全ての授業はできなくても、教科や単元を決めて、子どもの問いを中核にした授業を構成してみたい。追求のエネルギーの量と質が変わっているのが分ると思う。(芝)

